

目的 布地に適した縫い系ならびに針目の大きさを選定する際の考え方を手縫いにおける並縫いの場合について検討し、また正確な並縫いに対する表裏針、流れ針、踊り針の縫い目の強さについて比較検討した。

方法 試料布は市販の晒木綿、縫い系はカタン系20、30、50、80番を使用した。試長10cmの中央に試幅4.8cm（織系96本）当たりの針目数を6～48の数段階に並縫いを作り、シヨッパー型引張試験機で縫い目の強さを測定、同時に損傷状態をしらべた。また正確な並縫いに対する同じ針目数の表裏針、流れ針、踊り針についても同様に縫い目の強さを測定し損傷状態をしらべた。

結果 1. 並縫いではミシン縫いと同様に、縫系切断の段階では針目がこまかいほど強く、布切断になるとそれ以上針目をこまかくしても縫い目は強くならず、また縫い系切断の段階では同じ針目数のミシン縫いよりも弱く、布損傷を起こす縫い目の強さの限界はミシン縫いよりも低い。 2. 並縫いが布損傷を起こす時点は1目当たりの織系本数と縫い系の強さとの関係で決まり、布損傷を起こさないうちで最も針目数を多くすることができるのは正確な並縫いであるところから、正確な並縫いでは表裏針や流れ針より強い縫い目が得られる。 3. 表裏針は表裏の差の大きいほど、また流れ針は流れ分量が多いほど弱くなる危険があり、踊り針は踊り分量が多くなるほど強度低下を招くと考えられる。